

組織目標評価報告書（平成26年度）

部局名： **大学院社会文化科学研究科**

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標</p> <p>1) 改組計画の実現に向けた歩みのなかで、コース制の導入とコースワークの設定について検討する。</p> <p>2) O-NECUSによる学生交流を中心に、国際的ネットワークのなかで教育交流を推進する。</p> <p>3) 国際化を支えるための、充実した教育的支援を実施する。</p> <p>4) 東アジア共生プログラムを導入する。</p> <p>5) 地域の経済団体等と連携しながら地域に貢献する人材育成のための教育を実施する。</p> <p>6) 就職支援体制の整備をおこなう。</p> <p>7) 研究倫理に関する教育を実施する。</p> <p>8) 遠隔地教育システムの改善について検討する</p> <p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>定員充足率、交流先大学、留年・退学・休学者数、就職状況、国際交流に係わる教育活動参加者数</p>	<p>自己評価</p> <p>1)平成27年度より、博士前期課程のすべての講座・コースにおいて、コースワークを中心とする新カリキュラムが構築・実施され、コア・カリキュラムとしての「社会文化学基礎論」および修了要件別プログラム(研究深化プログラムとリサーチプログラム)が導入されることが決定された。</p> <p>2)O-NECUSプログラムに基づき、博士前期課程に双方学位制度4名、短期留学生9名を受入れた。また、長春理工大学をO-NECUSプログラムに追加し、短期留学生を受け入れることを決定した。</p> <p>3)国際化に向けての学生交流機会の拡大のため、サラマンカ大学(スペイン)を含む7大学との間で新たに協定を締結(今年度中の締結予定を含む。)した。また協定校から、海外特別入試による正規生2名、中国赴日本国留学生3名、特別聴講生31名、特別研究生5名を受入れた。附設の東アジア国際協力・教育研究センターでは、留学生への日本語論文執筆支援、語学パートナーの紹介、多文化学習・交流スペースの管理・運営、留学生・留学相談窓口の設置等を行った。この他、グローバル・パートナーズに設置される大学院予備教育特別コースのために、授業提供及び学生指導等を行った。</p> <p>4) 博士前期課程に特別履修コース「東アジア共生プログラムコース」を設置し、留学生や留学希望者を対象とする授業群を開講した。また日本学生支援機構の平成26年度海外留学支援制度(短期受入れ)に同プログラムを申請、採択された。</p> <p>5) 博士前期課程では、会社員や公務員のリカレント教育を担い、地域に貢献する人材の育成に力を入れている。平成26年度には地域企業から9名、自治体から1人を受け入れた。</p> <p>6) キャリア支援委員会が中心となり、キャリア開発センターと連携して、11月26日に博士前期課程学生(留学生を含む)に対して就職ガイダンスを実施し、大学院での研究や経験が将来のキャリアアップにいかに関与するかについて説明及び就職に関する種々の情報を提供した。</p> <p>7) 11月26日に研究者倫理に関する講習会を実施した。これらの会合に、留学生を含む約30名(資料のみ配布学生も含む)が集まった。</p> <p>8)新たなICT教育機器を導入して可動型システムを構成し、個別教室の機械と連結する講義収録システム、収録画像を情報統括センターと連携して配信するタブレット連結式教育システム、海外との遠隔通信を組み込んだ国際協働教育の環境整備を進めた。</p> <p>上記以外に、年12月に中国赴日本国留学生に対する専門教育を自然科学研究科と共に毎年担当することを決めた。これに伴い、今後毎年国費留学生枠15名分が本学に振り分けられる。</p>
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標</p> <p>1) 研究を盛んにしていくには、プロジェクト形式の研究を積極的に支援していくことが効果的と考えられる。そこで本研究科では、魅力的な研究プロジェクトによる成果に焦点を当て、その発信を推進していく。</p> <p>2) 学生の研究力と研究科内の研究成果をともに挙げる方策として、教員のリーダーシップのもとで、博士前期課程や博士後期課程の学生がグループを構成して行う研究形態が注目される。そこで本研究科では、教員と大学院生から成る研究プロジェクトへの支援を実施する。</p> <p>3) 研究の国際的競争力を高めるためには、国内外の大学等との情報交換や研究交流が重要である。そこで本研究科では、交流協定校を中心に海外の大学等との学術交流を積極的に進めていく。</p> <p>4) 研究の成果は広く世に知らされ、社会に還元されていくことが望まれる。そこで本研究科では、環境やニーズの変化について考慮しながら、より効果的な研究成果の公表方法を考え、改善を図る。</p> <p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>科学研究費補助金の申請率と取得率 シンポジウム等の開催 研究プロジェクトの実施 大学院生による国内外の学会での発表数</p>	<p>自己評価</p> <p>1) 大学機能強化戦略経費「東アジアにおける協定中核型学生交流ネットワークの構築と運営」を得て、東アジアとの国際的学術交流体制を整え、国際シンポジウムの形で「近代の岡山と東アジア—塩・人・書画—」に関する成果発信を行った。</p> <p>2) 教員がリーダーシップをとり大学院生とチームを組んで行う研究プロジェクトを、研究科内で公募し、3件を採択して支援を行った。</p> <p>3) 国際交流協定校に新たに7機関を加えた。協定校である嘉義大学人文芸術学院の李明仁教授を講師に迎え、平成26年8月26日に講演会「台湾の歴史学界における歴史研究—回顧と展望—」を開催した。また中国、台湾、日本の研究者を招いて、平成27年2月12日に国際シンポジウム「近代の岡山と東アジア—塩・人・書画—」を開催した。さらに協定校である東北師範大学が平成26年6月21-23日に開催したシンポジウム「中国と日本—文化交流と相互認識—」に、本研究科教員1名が参加した。</p> <p>4) 本研究科HPに、日本語版及び英語版で、研究科教員による研究トピックス紹介頁を新設し、国内外への研究発信を行った。機能強化戦略経費を得た研究プロジェクト代表者に、公開講座のコーディネーターを依頼する方針を立て、平成26年度は「イメージのなかの東アジア」の成果を広く社会に発信する、公開講座を実施した。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標</p> <p>1) 地域との連携を強め、地域の課題を克服するために、地域創成ネットワークアゴラを中心に取り組んでいく。</p> <p>2) 地域で現に活躍する人材に高度な専門知識を身に付けさせるため、組織経営専攻及び地域公共政策コースにおいて、企業や組織の管理職及び地方議会議員に対してリカレント教育を推進する。</p> <p>3) 地域に対して広く開かれた大学院であることを示すため、公開講座、新聞などを通じて研究成果を社会に発信する。</p> <p>4) 大学院のスタッフの観音を地域に生かすため、教員の地方公共団体等への委員の委嘱を奨励する。</p> <p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>公開講座の実施 地域創成ネットワーク・アゴラのフォーラム等の開催 留学生の地域企業への就職 職業人・社会人の学生数</p>	<p>自己評価</p> <p>1) 今年度3年目の取組として「地域と医療」をテーマに、講演会やワークショップを開催した。町おこし研究の一環として、県内移住者や若者との協働をテーマに岡山市職員らと「アゴラサロン」を開催するなど、岡山市や倉敷市と勉強会を開催した。</p> <p>2) 県議会の要請で、「岡山県議会地域公共政策セミナー」を企画し講師を派遣している。今年度は3回実施した。また、倉敷市議会と岡山市議会にも講師を派遣し、それぞれ5回と1回のセミナーを開催した。</p> <p>3) 東アジア国際協力教育・研究センター主催により、11月8日(土)～11月29日(土)に「イメージのなかの東アジア」を開催した(参加登録者24名)。また、組織経営専攻教員が順番で、山陽新聞に「岡山大MBA耳より講座」を連載した(4月22日から9回)。同じく「岡山大学MBAで活躍する修了生」も連載が始まった(12月5日から10回)。</p> <p>4) 各教員は以下の委員の委嘱を受けている。国家関係機関の委員(岡山家裁1件、岡山労働局)、自治体(県)関係の委員(岡山県41件、滋賀県1件、鳥取県1件)、自治体(市町村)関係の委員(岡山市19件、倉敷市16件、津山市4件、総社市4件、高梁市2件、備前市2件、赤磐市1件、真庭市1件、美咲町1件、姫路市3件、松山市1件、豊田市1件、北広島町1件)。</p>
<p>【総括記述欄】</p> <p>組織としての目標の達成度は、全体として良好であると考えている。個別的には、今後取り組むべき重要な課題は博士前期課程の定員充足問題である。短期的には、広報誌及びHPの抜本的な改定を行なうこと及びグローバル・パートナーズのプレマスターコースとの密な連携により受験生の増加を図る事を考えている。長期的には、研究科の改組を行い、より魅力的な研究科とする事を考えている。全体的には全学の改革方針に沿った改革を検討・実施する。教育・研究に係わる国際交流については順調に拡大を続けている。この流れが続くよう努力すると共に、中国以外のアジア及び欧米の大学との交流の拡大に努めたい。総合的な大学院の特色を伸ばす、学際的な研究のシーズ作りにも励むと共に教員と学生(博士後期課程)との共同研究の成果が上がるように努める。</p>	